

だい きやまとしたぶんかきょうせいかいぎ だい かいがいぎろく ようやく
第3期大和市多文化共生会議 第3回会議録(要約)

にちじ ねん がつ にち ど
日時: 2013年5月25日(土) 14:00~16:20

ばしょ やまとしやくしよぶんちようしゃ かいがいぎしつ
場所: 大和市役所分庁舎2階会議室

しゅっせき いいん いしま いたうひろこ いたうもとみ いなふく おかざき
出席: 委員(石間フロルデリサ、伊藤裕子、伊藤素美、稲福スーザン、岡崎チャ

メイン、紺野勝、宮嶋耕治) / ファシリテーター(清水睦美) / 大和市国

さい だんじよきようどうさんかく か ふなこしえいいち こうえきざいだんほうじんやまとしこくさいかきょうかい た
際・男女共同参画課(船越英一) / 公益財団法人大和市国際化協会(田

なかひろこ こにしえりこ いしかわかずとも いじょう めい けいしやうりやく
中弘子、小西永里子、石川和友) 以上12名(敬称略)

けっせき いいん あらいまさのり きくちけんいち こばやし やまだちよん
欠席: 委員(新井政則、菊池健一、小林ホルヘ、ファンチイフォン、山田静
娥)

ぜんかい ふ かえ
1 前回の振り返り

ぜんかい かいぎろく がつ もと かくいいん で いけん じむきよく せつめい
前回の会議録(3月)に基づき、各委員から出た意見を事務局から説明した。

さいがいたげんごしえん しぜん さいがい お あと
災害多言語支援センターは事前にあるものではなく、災害が起きた後につくる。

さいがいたげんごしえん つく さき き じゅうよう いけん がいこく
災害多言語支援センターをどこに作るのか先に決めることが重要という意見と、外国
じん たい じゅうほうていきょう じゅうじつ じゅうよう いけん
人に対する情報提供の充実が重要という意見があった。

また、外国人の中には日本語に不自由していることで不安になっている人がいるので、
にほんじん ちが ばしょ ひなんじよ ひつよう いけん たい にほんじん がいこく
日本人とは違う場所の避難所も必要ではないか、という意見に対して、日本人と外国
じん わ いけん
人を分けるべきではない、という意見があった。

とはいえ、さいがいたげんごしえん がいこくじん しえん ばしょ がいこくじん
災害多言語支援センターはあくまで外国人を支援する場所で、外国人の
ひなんじよ いけん
避難所ではない、という意見もあった。

さいがいはっせい さいがいたげんごしえん うご
2 災害発生と災害多言語支援センターの動き

しりょう もと さいがいたげんごしえん うご じむきよく せつめい
資料1に基づき、災害多言語支援センターの動きを事務局から説明した。

さいがい お あと やまとし さいがいたいさくほんぶ あと たげんごしえん
災害が起きた後、はじめに大和市の災害対策本部ができる。その後、多言語支援セ
ンターができる。

たげんごしえん やまとし こくさいかきょうかい うご じぶん ひさい
多言語支援センターは、大和市と国際化協会が動かす。自分たちも被災しているの
で外部からの応援も頼む。さいがい きょうりよく ひつよう
災害ボランティアやNPOの協力も必要となる。

やまとし さいがい しゃかいふくしきょうぎかい しゃきょう うんえい
大和市災害ボランティアセンターは社会福祉協議会(社協)によって運営される。ボ
ランティアセンターと多言語支援センターが連携する必要がある。

たげんごしえん ひなんじよ じゅうほうしゅうしゅう はんたい じゅうほう ていきょう
多言語支援センターは、避難所において情報収集したり、反対に情報を提供したりす
る。かながわけん よこはまし たげんごしえん れんけい はか
る。神奈川県や横浜市でも多言語支援センターができるので、それらとも連携を図る。

3 意見交換

災害多言語支援センターの支援内容について、ファシリテーターから説明した。そのあと、意見交換を行った。

災害が起きた場合、元気な人と、助けが必要な人の2通りに分かれる。今日は、自分たちが元気な人(家族の安否も確認できた人)であると仮定して考えていきたい。

まず、大きな災害が起きた場合、大和市で災害対策本部ができて、その後、外国人支援を対象とした多言語支援センターが立ち上がる。

たいへんな混乱の中、委員である皆さんのような地域のことを知っている人たちが、おそらくは災害ボランティアとして多言語支援センターに集まってくる。そのとき、何をするのか分からないと困るし、きっと想像を超えることが起きるはず。あらかじめシュミレーションをしたり、頭の中で想像をしたりすることが大事。

それでは、どんなことを支援するか。資料2の通り整理してもらった。

まず、「外国人の被災状況はどうなっているのだろうか？避難所についてどういう状況なのか、確認しなくては…」について。市はあらかじめ避難所を指定しているので、避難所に行って情報収集をする必要が出てくる。

次に、「いろいろな国の言葉で情報を提供しないとイケないな…」について。つまり、翻訳や通訳をする必要があるということ。

それから、「外国人が集まる避難所ってたいへんだらうからサポートが必要かも…」について。前回も話したが、外国人も日本人と一緒に避難所がよいという意見があった一方で、日本語がうまく話せない人たちを中心にした外国人専用の避難所があってもよいという意見が出た。

もちろん、ほとんどの外国人は、近くの避難所へ行くだろうが、うまくできない一部の人のための避難所を準備して、その避難所をサポートする必要がある。

例えば、東日本大震災のときに、不安のために避難所をあちこちと移動していく外国人が見られたようだ。もちろん、日本人と同じ避難所であるのがベストだが、うまく生活できない人たちのために外国人専用の避難所があってもいいのではないかな。

東日本大震災では、こんなエピソードもある。ある人が、自分の家にある米をすべて避難所に差し上げた。ところが、後日、物資を受け取りに避難所へ行ったら、「あなたは被災していない」という理由で何ももらえず、みじめな思いをしたとのこと。

つまり、日本人だからといって、みんながやさしいわけではない。みんなが余裕を持って助け合える状況ではないことも想像しておく。

「外部団体から問合せがたくさん来るだろうなあ…」という部分。大使館などから被

さいじょうきょう あん び かくにん といあわ じょうほうていきょう ひつよう せま かんが
災状況や安否確認の問合せがきて、情報提供をする必要に迫られることが考えら
れる。

また、「ボランティアが必要」とは、ボランティアに来てくれる人を集めて、うまく派遣
する必要がでてる。

外国人専用の避難所は必要なのか？

委員(日本):私自身、南林間に住んでいて、災害が起きたら林間小学校に避難す
ることを考えている。だれもが、一時的に安全そうな学校などに集まろうと思う。
その後、二次的、三次的にどのような人の動きができるのかを考える必要があるの
ではないか。

ファシリテーター:今日は災害が起きて3日以内を想定しての話。

委員(日本):一時的には、避難所にたくさんの被災者が集まる。そういう混乱した状
況の中、多言語支援センターと各避難所の間でどのように連絡を取り合うのか、考
えないといけない。また、ベトナム、ラオス、カンボジアの難民出身の人たちの中には、
読み書きできない人がいるので、その場合は身ぶり手ぶりの通訳が非常に重要にな
る。乳幼児や食べ物などにも配慮する必要が出てくる。

委員(日本):災害が起きた後の3日間というお話だが、その時点では、誰もが(日本
人でさえ)何がどうなっているのか全く分からない大混乱の状態だと思う。外国人だけ
の設備を仮につくろうとすると、かえって外国人が無視されてしまうのではないだろうか。
最初の3日間であれば、外国人も日本人と一緒にいいのではないかとと思う。

委員(フィリピン):私は自分自身が日本人の中に入れるタイプだと思っている。しかし、
日本に初めて来た人、日本語がわからない人、そういった人たちのために今話してい
ることが大切なのだと思う。

委員(日本):外国人と言っても、70か国あって、言語もバラバラ。それだけの通訳を
確保することができないのであれば、日本人と一緒に避難所にいた方がいい。私は
日本人と外国人を分ける必要はないと思っている。お互いに歩み寄り、協力していくし
かない。それから、外国人には事前に自分から自分の安否を知らせることの必要性を
知っておいた方がいいのではないか。

ファシリテーター:誤解があるかもしれないが、外国人の大半は日本人と同じ避難所
であるのが大前提。外国人専用というのは、あくまで日本人とうまくできない外国人の
ためにつくったらどうか、というもの。

委員(ペルー):でも、最初の3日間ということであれば我慢できると思う。外国人の避

難所は、その後で必要になる。全く日本語が分からない人の場合、同じ国の人同士で支え合う方がいい。

委員(日本):日本語ができなくても、英語、スペイン語、フランス語のどれかできれば、コミュニケーションはとれる。

委員(フィリピン):はっきり言うと、外国人はわがまま。外国人専用の避難所は必要ない。

委員(日本):15年外国に住んでみてわかったことがある。現地の間人は100%の人で、言葉、文化、習慣が全部わかるが、自分のような外国人は0%の人。ただ、その中で努力して、40%くらいまで理解を高めていって、できるだけ100%に近づけようと思うが、100%以上は抜けられない。それ以上を要求すると、その社会から非難されてしまうのだと思う。

委員(日本):日本の歴史を考えると、日本人以外の外国人だけの場所となると差別と見なされるケースもあった。

委員(フィリピン):もし、別の避難所があるならば、自分から行きたい、ということか。あるいは、どうしてもうまくいかない場合に行ける場所のことか。

委員(フィリピン):日本人はよく我慢できる。なのに、なぜ外国人は我慢できないのか?私も外国人だが、なぜ外国人を特別にするのか、理解できない。

委員(ペルー):例えば、観光で日本に来た人や一人での人については、不安で悪いことばかり考えてしまうので、配慮が必要かもしれない。

委員(ベトナム):新潟地震のときに、中国から来たボランティアがおもちゃを中国人だけに配ったら、日本人が怒ってしまった。外国人だけ別の避難所をつくると心配な点は残るが、希望する人は行けるような仕組みを作ればいい。

委員(日本):多文化共生という言葉があるように共に生きることが大事。基本は地域住民で、隣近所を大切にして、お互いに助け合う。避難所で何か問題があれば、多言語支援センターでその解決を手伝うことができるように柔軟さを持つことができれば。

3日間で対応できるのか?

ファシリテーター:ここにいる皆さんは日本語ができるので問題ないが、もし私が日本語の通じない国にいて、日本語が通じる避難所があったら、おそらくそこに行くだろう。

委員(フィリピン):絶対に大丈夫。外国人だけの避難所では、いろいろな国の人がいる。別々の言葉を話す人がいる。どのようなコミュニケーションができるのだろうか?

委員(日本): いろいろな地域の多言語の人を集めると、共通点がないため、トラブルが多くなる。カンボジア、ベトナム、ラオスの3か国、3言語の人が一緒になるだけでも大変な状況がある。過去にたびたび仲裁に行ったこともある。

委員(フィリピン): 今はあらゆる状況を準備している状態なので、準備するかどうか決めるべきだと思う。「そのような避難所はいらない」と言われたら準備すらできなくなってしまう。

委員(日本): そのような必要性があるならば、多言語支援センターを中心に臨機応変に対応して、特別に設置する。

ファシリテーター: そうはならない。事前にシュミレーションをしてつくることを決めておかなければ、いざという時につくことはできない。

委員(日本): ただ、大和市は南北に長く、その場所に行くのも大変。

ファシリテーター: 困ったらそこに行く、という場所をつくるかどうか。皆さんの意見だと、今ある場所で我慢しなさい、ということになる。

委員(日本): いちよう団地や林間小学校などには外国人も自然に避難してくるだろう。そういった避難所は外国人が多いという特徴があることを宣伝してもよいのでは。

委員(日本): しかし、一体どうやって外国人に専用避難所の場所を知らせるのか。

ファシリテーター: 多言語支援センターの通訳ボランティアが避難所で必要な人に教える。

委員(日本): すべての言語の通訳ボランティアがいるわけではないので、はたしてそれだけの通訳ボランティアが確保できるのだろうか。

ファシリテーター: もし、すべての言語の通訳ボランティアが必要であるならば、すべての避難所でも必要という話になってしまう。

大和市: その場合、避難所にいる人たちが努力して伝えなければいけない。

委員(日本): はたして3日間で対応できるのだろうか。むずかしいのではないかと。

ファシリテーター: 3日間で解散するわけではなく、集まった人数によってその期間がのびることが考えられる。例えば、避難所の場合、最初の3日間を想定しているが、被災状況がひどければ、1か月、2か月とその期間はのびる。東日本の震災のときも、最初の想定は1週間だったが、それがどんだんのびた。避難所を閉鎖できるかどうかは、そのときの状況による。

委員(日本): すると、最初の想定は3日間だが、その想定は何カ月間かにのびることもあるのだろうか？

ファシリテーター: のびる可能性はある。専用の避難所をつくれれば、3日後に外国人の

避難者が増えてくるかもしれない。そうではなく、日本人と同じ避難所で通訳などのボランティアを派遣して対応するか、どちらを選ぶか。

委員(フィリピン):日本人と同じ避難所だとすると、たくさんの通訳ボランティアが必要となる。一か所の方が通訳の対応がしやすい。

委員(ベトナム):一般の避難所だと、精神的に大変だと思うが、同じ国の人が一か所に集まっていれば、通訳が効率よくできる。

災害が起きたとき、人は寛容なのか？

委員(日本):私たちの中で外国人というと、ひとくりにしてしまおうとする。外国人といっても文化や宗教、食生活などそれぞれ違う。この外国人同士の対立はすごいものがある。言ってしまうえば、戦争のつぼみみたいなところもある。フィリピンのグループ、ベトナムのグループなどと個々に対応すべき。

事務局:東日本大震災の際、仙台で起きた事例だが、外国人の被災者が同じ言葉や同じ宗教のつながりを求めて避難所を移動していく傾向がみられたようだ。

ファシリテーター:ただし、日本人がそこまで寛容な(やさしい)のか、という問題がある。例えば、A避難所にいる外国人が、B避難所にいる外国人をA避難所に呼んだ場合、A避難所を運営する自治会の人たちはそれを許すだろうか。

委員(日本):そういう仕組みをつくるのが支援だと思う。

ファシリテーター:自治会の人たちがその地域に住んでいない外国人を寛容に受け入れてくれるだろうか？自分の住んでいる自治会の避難所に行きなさい、などと言われたりしないのだろうか？

委員(ベトナム):旅行などで偶然、大和市にいた人でも入れてはくれるだろう。

ファシリテーター:でも、ずっといることはできない。

委員(日本):例えば、赤ん坊の泣き声を極端に嫌う人がいる。避難所それぞれの特徴を示す必要があるのだと思う。いちよう団地の周辺では外国人が多いだろう、などと地域に住む人たちの特徴を想定することは可能だと思う。

大和市:指定避難所は小学校、中学校、高校などで、各地区ですでに決まっている。当然、外国人も近所の避難所へ行くことになる。現在、市で外国人専用の避難所をつくる計画はない。多言語支援センターでトラブルへの対応が必要になるかもしれない。あるいは、外国人が集まりやすい場所が必要なかもしれない。避難所のみんなが外国人に対して寛容なわけではない。

ファシリテーター:東日本大震災で起きたことを考えると、災害時は基本的に不寛容

を前提にした方がいいのだと思っている。災害ユートピアとも言われ、テレビや新聞などからはハッピーな話しか聞こえてこない。だが、現場の声を聞くと、発達障害児を持つ親の苦労や、犯人扱いされる外国人などの話があった。我慢、我慢の先に自殺する人だっている。寛容でみんなが支え合うのを前提とするより、不寛容で自分中心になってしまうことを前提とした方がつらいと思う人が少し減るのでは、と思う。

大和市：先日はたった2時間の避難所シミュレーションであったけれども、おそらく避難所の個別対応で市職員がすごく責められるのだと感じた。避難所を運営する上では、市職員だけでなく、同じ認識を持つスタッフが必要と思う。どこまで要求を受け入れて、どこから我慢してもらうのか、その判断はむずかしいので日頃からの備えが必要。また、配慮が必要なのは、外国人だけでなく、高齢者や障がい者に対しても言える。

だれが避難所を運営するのか？

ファシリテーター：東日本の震災の際、大和市と似たような都市部の避難所では、自治会の人々が運営を放棄したという事例があった。後を引き継いだのは、神奈川県からきた市職員。なぜなら、いくらクレームを受けても1週間で交代するから。その方法で、その地域はとりあえず収まった。また、食糧を盗まれるのを防ぐため、見守る必要がある。避難所を運営する市職員は夜中も眠らなかった。決してハッピーな避難所というわけではない。

委員(ベトナム)：その話は初めて聞いた。

委員(フィリピン)：しかし、日本人と一緒に避難所でうまくいかない外国人は、たとえば外国人専用の避難所があってもうまくいかないと思う。

委員(日本)：阪神淡路大震災の際には、長田区などの地域で日本人と外国人がまとまったという事例がある。

ファシリテーター：それは、阪神淡路大震災のときに、外国人のための避難所ができたことをきっかけに生まれた。

委員(日本)：避難所で外国人の人たちとコミュニケーションをとったことがきっかけで、鷹取などの地区で、今でも続く日本語教室の活動につながっている。

委員(日本)：東日本大震災の際には外国人専用の避難所みたいなものはできたのだろうか？

ファシリテーター：東日本の際にはなかった。大和市のような外国人集住地域ではどうするのか、という話。東北は集住地域ではなく、各避難所に外国人が一人いるか、いないか、といったレベル。外国人研修生たちはすぐに本国に避難した。

委員(日本): 私たち委員だけでなく、フィールドワークで他の人たちの意見も聞いてみてはどうか。ここで決めるのは難しい。

ファシリテーター: これまで話し合ったことを確認したい。

- 大きな災害が起きたら、多言語支援センターをつくる。センターがやるべき仕事としては、避難所で情報収集し、必要な情報を提供するという避難所に対する仕事がある。また、センターで通訳や翻訳が必要になることもある。また、大使館など外部からの問い合わせ対応やボランティアのコーディネートなども仕事の一つになってくる。
- 外国人の専用避難所については、この会議の場ではつけないという意見が強く出たものの、これからフィールドワークへ行って、その点も含めて検討していく。特にうまくいかない人、弱い立場の人を考えると、フィールドワーク先の人に聞き取りをしていく。

再び、外国人専用の避難所は必要なのか？

委員(日本): 仮に外国人だけのための避難所ができた時、地域は物理的な支援が必要になる。外国人専用避難所にだれも支援の手が差し伸べられない、という状況にならなければいいが…。逆に疎外されることを心配している。

ファシリテーター: 避難所の認定については、現在、想定されている避難所だけでなく、状況によっては個人の家が避難所になる場合もあった。

委員(日本): そういった場合には、その認定された避難所に食糧が届けられるのか。

大和市: 現状では、指定避難所のみが支援の対象となる。ただし、現実的には指定されないが、実際なった場合にはそこにも物資を送るようになるのだと思う。

ファシリテーター: 私が知る限りでは、地域の共同会館のようなところが高台にあったために、当初は避難所という想定はされていなかったが、あとで避難所に認定されていた。ただし、10人と人数が少なかったため、近くの避難所に移動するように指導を受けていた。とはいえ、一度コミュニティができてしまうと簡単にはなくならないもので、4~5か月は続いた。そういった認定避難所はたくさんできていた。

委員(ペルー): 悪いことを考えると、南米の国の人同士は言いたいことをすぐに言うてしまうので、かえってトラブルを起こしてしまうと思う。

大和市: 例えば、避難所などで面識がない外国人同士が助け合うことを想像できるか？

委員(ペルー): 同じ国に限らず、人間同士なので助け合わなくては、と思う。大和市に住む多くの外国人は日本に長く住んでいる。どの避難所にもある程度の外国人が避難するはずなので、そういう外国人に通訳などを手伝ってもらえると思う。面白いことに、

例えば、私のようなペルー人がフィリピン人と日本語を使って会話ができる。母国語が違う外国人同士が簡単な日本語で通じ合える。

委員(フィリピン): 小学校の支援級に外国籍の子どもがいるが、そういった子が避難所で生活するのはむずかしいと思う。

委員(ベトナム): 私は、できれば A地区、B地区など地域が違っても避難所を移動できるようになればいいと思う。

委員(ペルー): それは3日後の話なのだと思う。最初の3日間はそこまでいかない。

大和市:(避難所の生活が)長期化すると課題が出てくるだろう。

委員(フィリピン): 3日後には外国人のための避難所が必要になると思うし、周りもこの人には別の避難所が必要なのだと気付くと思う。本当に必要であれば、あるといいと思うけれども、最初の3日間ではそこまで届かない。

委員(フィリピン): 障がいのある人やがんばってもがんばれない人にとってはどうだろうか？

委員(ベトナム): こんな話がある。外国人で特別な理由があって、小学校の修学旅行にどうしても子どもを行かせたくない親がいた。担任の先生と話し合っ、結局は行かせたが、そういうケースもあるので、必要な人には避難所があったほうがいい。

委員(日本): 保育園や教会など避難所にできる場所はたくさんあるので、事前に開拓して、避難所の候補をたくさん用意できたらいいと思う。

ファシリテーター: 偶然避難所に指定されるならいいが、事前に指定するとなると、だれが運営するのか等を決めなくてはならない。たくさんあればいいことではあるが、市では抱えきれないのではないかな。

委員(日本): 例えば、保育園に避難する場合、そこに子どもを預けている人が優先されるだろう。

大和市: 一方で、市の機能としては、保育園が必要になる。保育園が避難所になると、本来の保育園の運営ができなくなってしまう。小中学校も同じ。つまり、子どもを教育する機能がなくなってしまう。また、避難所の運営を特定の個人が責任を持って行うのは無理があり、避難している地域の人たちが運営に関わっていかないといけない。

ファシリテーター: 学校が体育館のみを避難所として開放するのは、子どもたちの居場所を確保する意味もある。一旦、普通教室を避難所として開放してしまうと、その教室から被災者を移動させることは難しい。体育館にたくさんの方が避難してきたとき、普通教室を開放するかどうか、校長は難しい判断をしなくてはならない。みんなが自分中心だと避難所は大混乱になるので、だれがボランティア性を持って動けるかが大

事。また、日常的に豊かな生活を送っている人は余裕があるのでボランティア性を高く持てるけれども、いつも厳しい生活を送っている人はむずかしいので、避難所によってもいろいろな状況が考えられる。これもシュミレーションなので、ここで話したことを外でたくさん話してもらおうといいのかなと思う。

4 フィールドワーク先の検討

(留意点)

フィールドワーク先に出向くときは、みんなで近くに集合してから、訪問する形にした方がオフィシャルな気持ちで臨める。また、フィールドワーク先への質問事項は事務局側で案をまとめる。

こちらの会議室に招待してもいいが、なるべくフィールドワークに出かける形をとりたい。実際の現場に行き、外国人の声を直接聞くことで実感がわいてくるので、なるべく全員が参加して現地に行くような形をとる。

(日程について)

年間の日程はあらかじめ決めしたが、例えば、教会には日曜日に行くことが予想されるなど、相手の都合に合わせて日程を変更しないといけない場合もある。

(その他)

例えば、団体だけでなく、石間さんの近所のフィリピン関係者を集めて聞き取りする、といった方法も考えられる。知っている人たちの範囲で集まってもらう方法もある。

フィールドワーク先として、日本語教室へ行くのに賛成する。団体の人たちは日本語能力もあり、すでに地域に溶け込んでいる人が多い。それよりは日本語ができない人たちに聞いた方がいい。

あるいは、外国人を多く雇っている会社に聞き取りする手もある。他にも、いちよう団地などの外国人集住地域も候補になる。

次回の6月29日(土)については、こちらの会議室に来ていただける方、もしくは土曜日に開催しているかたつむりの会に出かける方向で調整する。

5 その他

今年度の会議日程と外国人市民サミットの日時【2013年6月30日(日)@大和市生涯学習センター】を伝え、会議を終了した。